教育社会学における「地域」概念の再検討

—「社会空間論」の視角から—

比較教育社会学コース　殿　岡　貴　子

A Reconsideration of the Concept of "Region" in Sociology of Education:
From the View of "Socio-Spatial Theory"

Takako TONOOKA

The thesis of this paper is to reconsider of the concept "Region" in Sociology of Education from the view of "Socio-Spatial theory". Today, we have got so many problems involved regional aspects, so the concepts of "Region" could be seen everywhere. In this circumstance, the concept is used in various meanings. However, it seems that a common epistemological stand is latently accompanied by the general use of "Region". It is the assumption that "Region" is a fixed spatial unity we take for granted. Since that fails to grasp the social characteristics of regional phenomena, we need to reflect on the spatiality of "Region" for appropriate analyses.

In this paper, I aim to make clear how the concept "Region" has been used as an analytic concept in traditional Sociology of Education. Briefly, Sociology of Education has focused on social structure thought of being covered whole state, and through the dominant perception of space which is derived from modern society, it has had a complete disregard for socio-spatial analytic viewpoints and hasn't required making issues of them. Hence, the concept of "Region" has been treated as a mere territorial unit without spatiality, in other words, homogeneous space in studies on regional differences of college enrollment rate, for instance. That indicates the methodology of regional structure analysis and the epistemology of region based on existent districts may lose sight of socio-spatiality of "Region", that is, what the regional space is composed: the sociological meaning of the boundary and regional space formation according to a reflection of how we determine "Region" socially.

In conclusion, it is important to become conscious of the spatiality of "Region", especially our spatial recognition which has relation to social activities and regional mechanisms. Characteristically, the concept of "Region" results from the inevitable relation between a socio-spatial form and a dynamic social process of regional space. Thus the space of "Region" must be reconsidered from this viewpoint stressed on the relative socio-spatial perception.

目　　次

1　問題の所在
2　モダニズム的空間認識の再考
　A　空間をめぐる議論の興隆とその背景
　B　教育社会学は空間をいかにまなざしてきたのか？
3　「地域」空間の射程　—地域構造分析の特徴を手がかりに—
4　結論　—「社会空間論」の視角による「地域」空間の相対化—
註

1　問題の所在

今日，至るところで「地域」にまつわる多くの問題が語られている。見渡せば「地域」をめぐって議論百出の状況にある。「地域」がこれだけ研究者の関心を惹き，盛んに問題化されるのは，確かに「地域」をめぐって切実な社会問題が現前化していると我々が認識しているからに他ならない。しかしながら，「地域」が問題化されるとき，我々は一体それを何と想定し，理解しているのであろうか。「地域」は様々に語られるけれども，

よくよく考えてみれば，「地域」とは何か，あるいはそれをどのような文脈で語っているのか，という根本的な課題に，我々はこれまでどれほど真摯に向き合ってきただろうか。

そもそも「地域」とは多義的な概念であるため，語られる文脈や意味付けによって，様々に解釈され，意味付与されている。「地域」概念は，研究対象や学問的ディシプリン，問題意識の相異によって様々に定義づけされるものなのである[1)]。また，学問研究における方法概念としての「地域」でなくとも，日常的に使用される「地域」という用語が必ずしも一義的ではないことは明らかである。ところが，「地域」をめぐる議論が想定する「地域」には，大概一定の共通認識が潜んでいるのではないだろうか。それはすなわち，「地域」を所与のものとみなし，あらかじめまとまりを持った空間枠組みとして無条件にその範囲を設定するという認識論的態度である。当然，教育と「地域」をめぐる議論もまた然りである。そうした態度を有している限りにおいて，「地域」は単に社会現象が生じるステージというような静態的概念の域に留まり，「地域」と多様な社会的諸過程との関係性が切断され兼ねない固定的な枠組みという性格を強く帯びるようになる。

そこで本稿では，教育社会学における「地域」概念の位相ならびにその特徴を社会空間論の視座から問い直し，分析概念たる「地域」について検討を加えることで，今日的な「地域」空間を動態的に把握しうる効果的な視点を生かした研究の方向性を探ることを目的とする。この作業は，「地域」の諸問題が様々に展開されている現在，「地域」概念を改めて問い直すことでその社会的意味を明確にし，研究の分析視座として有効な地平を見極める一助となるはずである。我々は今や「地域」が物事を語る際に，そして生活の基盤として，さらには，現実の政策課題として欠かせないものであることを知っている。しかし，やみくもに「地域」をスローガン的に追い求めるだけでは，かえって「地域」をめぐる事象の把握が疎かになる危険を孕んでしまうだろう。「地域」は多用な課題が輻輳する概念であるからこそ，「地域」という社会的な単位をどう見るか，その認識を浮き彫りにしたところから政治的・文化的・政策的・教育的課題を研究対象として具体的に分析していくプロセスを最低限踏まえなくてはなるまい。そして，「地域」に対する我々の空間認識の再検討は，まさにその中心を占めることとなる。

以下の作業としては，まず教育社会学における従来の空間認識を検討したうえで，「地域」が示唆する空間形態について考察する。そして，「地域」を扱う教育社会学が，現象に迫る有効な「地域」の概念化をなしえていない状況にあることを批判的に捉え，最後に「地域」空間を社会的諸過程との関係性から把握する必要性を主張する。

なお，本稿では「地域」という概念を，人間を主体とした諸集団や社会関係といった「社会的局面」を示す「地域社会」とは区別し，自然環境を含めた社会的諸関係の客観的な基盤として何らかの空間性を有する「空間的局面」を指示するものとして扱う中西(1993)の定義に従うこととする[2)]。

2　モダニズム的空間認識の再考

本節ではまず，本稿の問題意識にアプローチするための前段として，学問的に空間の把握がいかに展開してきたのか，現在の社会空間論の趨勢を概括する。それから，教育社会学における社会空間の位相を明らかにし，その空間への対峙がいかなる課題を抱え込んできたのかを指摘する。これによって「地域」の空間的局面に対する理論的解明への示唆が得られるだろう。

A　空間をめぐる議論の興隆とその背景

今日至るところで，現代社会のあり様を語るキーワードとして空間が取り上げられている[3)]。それは単純に一時の流行廃りとして皮相的に展開されているわけではなく，現代的な課題を扱う際の論議の要となっているといえるだろう。例えば，既に多くの論者によって，その意義が主張されている。—「結果を隠蔽するのは時間ではなく空間である」(バーガー)，「空間の作り出す差異」(セイヤー)，「ポストモダンという時代に含意されている新しい空間性」(ジェイムソン)，「現代資本主義において明らかに重要な要素は時間ではなく，むしろ空間なのだ」(アーリ)，「人類の思考方法はますます地理的なものとなっているのであり，あらゆる社会科学はそれに対応しなければならない」(ブローデル)，「わたしたちの時代が持つ不安は，根本的に空間と関わっています。それは時間との関わりよりも，疑いなくはるかに大きいものです」(フーコー)[4)]—。一瞥して明らかなように，空間を取り上げる意味を主張する論者の学問的背景は様々である。ここから，空間を論じることの意義が，学際的に広く認められているのだといっても過言ではない。

こうした社会空間論の活発化の理由は，大きく分けて二つ考えられる。一つは，現実の社会状況の変化，

一つは，われわれの思考枠組みを問い直す知的な変容である。前者は，「グローバリゼーション」と表される，人・モノ・情報などの流動性の高まり，空間障壁を超越して生じる社会現象や空間的距離にとらわれない社会システムの拡大など，多くの社会関係が相互行為のローカルな文脈から引き離され，時空間の無限の拡がりのなかに再構築される「脱埋め込み」[5]が日常生活レベルで生じるようになったことが挙げられる。また，「ローカリゼーション」や地域主義，社会制度や政策方針における地方分権化の潮流なども，現代の重要課題となっている。そういった空間変容を随伴するリアルな社会変化のなかで，これまで自明と思われてきた空間的枠組みでは，立ち行かなくなる事態が生じているのである。

後者は，ポストモダニズムをめぐる議論に通じるものである。近代社会の終焉や反省が叫ばれて久しいが，その是非は別にしても，ポストモダンに関する知的フレームによって，空間の認識問題に焦点が当てられるようになったことは重要である。そして，社会へのまなざし自体を問い直すこと，あるいは相対化することへの注目が集まり，近代社会を多元的に把握する構えは，社会科学をはじめ多くの分野に多大なインパクトを与えたことは周知のとおりである。

近代社会理論は，社会の効率性や合理性を高める単一的で，標準化された時間が空間を覆うことによって，結果的に空間的差異を打ち消すという「時間による空間の絶滅」(マルクス)と呼ばれる空間認識の傾向が強かった。つまり，資本主義，産業主義の発展の基盤には何よりもクロック・タイムに代表される客観的な時間と，一元的かつ絶対的な空間があると認識されていたのである。あるいはまた，近代社会原理そのものに言及する議論においては，より明確に空間への配慮を欠いた時間観念への偏向を認めることができる。例えば，近代社会の西欧型発展モデルを重視する歴史的発展論，単線的発展論は時間軸を中心に据えた理論の代表的なものである[6]。

このように，近代社会理論は十中八九，「空間を不在とする」理論であった。しかしながら，明示的に空間を問わずにありえたのは，逆にいえば，改めて問い直すまでもない常識的な空間に対する前提が潜んでいたからだと考えることもできるだろう。主立ってこれまでの社会理論が空間を不在としてきたというのは，空間概念がまったくないわけではなく，モダニズムとむすびついた空間概念にこだわってきたということなのである[7]。こうした空間を社会理論から排除せしめる前提こそが，近代社会の空間的特徴であった。それが，先に述べたように，もはや画一的な認識によっては近代空間を表象しえないことが明らかになりつつあるのと同時に，空間的な語りは時間的なそれに比して，認識上の重要な鍵であるとみなされるに至ったのである。

今や，空間は社会的に非常に意味のある，そして現実の社会変化に即した問題となった。多くの社会科学領野では，この「社会理論の空間的転回(The spatialization of social theory)」と呼ばれる社会思想の核心部分における激変，動揺を真摯に受け止めようとしている[8]。結果として，社会空間論が体系化されるにつれ，これまで無自覚に使用されてきた空間が社会といかなる関係性を有しているのかが，演繹的に俎上に載せられるべきトピックとして頭をもたげてくることとなった。それでは，空間概念が現代社会分析にとって不可欠になっている現在，教育社会学では空間はどのように扱われ，位置付けられてきたのであろうか。

B　教育社会学は空間をいかにまなざしてきたのか？

すでに見たように，社会科学における社会空間論の興隆は，空間の重要性を強調してやまない。一方で教育社会学ではどうだろうか。結論的にいえば，いまだ教育社会学での空間をめぐる問題化はなされていないに等しいといえる。それはなぜなのか。この問いに答えるには，教育社会学研究の認識論における空間把握を一度検討する必要がある。そして冒頭の問題意識に戻れば，普段意識化することのない「地域」の空間軸を取り上げることによって，「地域」現象を分析する方法概念として洗練することを本稿は目指している。教育社会学の空間認識が「地域」空間認識と対話し，その方法概念の規定性に一定の拘束を与えていることは容易に想像できよう。しかるがゆえに，教育社会学における空間認識を論じることは，「地域」空間の叙述および考察の契機を与えてくれるのである。

さて，教育社会学がその研究対象とする教育現象(例えば，教育の量的拡大・大衆化・制度的普及・教育問題・受験競争など)がどこで生じているかといえば，それはいうまでもなく日本社会である。社会学の研究対象があくまでも様々な社会関係であって，空間は二次的な位置づけでしかなかった[9]ことを補助線としつつ，その空間的特徴を述べてみたい。日本の教育社会の社会学的分析では，主として以下のような事実認識と分析観点が備わっている。第一に，教育の大衆化や量的拡大，および教育システムの全域網羅性によっ

て，誰もが教育を受けているということである。これは，教育の大衆的拡大を基盤に形成された社会として，「大衆教育社会」と呼ばれている[10]。第二に，教育システムに付随する教育的価値や心性が日本社会にあまねく普及していることである。第三に，受験競争のような教育の社会的現象は日本社会全体を巻き込んで生じているということである。例えば，競争に焚きつけられた人々が受験システムに刻み込まれたシナリオを採用する社会には，「大衆受験社会」という名称が与えられている[11]。ここでは如上の事実認識，あるいは分析観点の真偽を問うのではなく，こうした前提を有する教育社会学に潜む空間とはどのようなものか，ということを問題としたい。したがって以上から，教育現象の一般性，普遍性に基づく社会の空間的特徴は，教育に関わる事象が展開される舞台としての均一的・絶対的な空間であると要約することができる。

別言すれば，教育社会学が扱っているのは空間を捨象した針の頭のような一点世界(one-point world)[12]であり，その一点世界の空間的次元を説明するならば，そこには空間が皆無というのではなく，社会現象の普遍性・広範性・一般性に裏付けられた均一空間および社会を語る際に，近代社会に特有の一元的空間を想定した全体社会理論の志向性を強く有するということなのである。またそれは，教育社会学での常識的な空間の前提が，近代社会論に典型的な「空間を不問に付す認識枠組み」であることを含意する。近代社会理論はフーコーが指摘するように，空間を「死んだもの，固定されたもの，不動のもの」として捉えることによって，空間を排除してきた[13]。そこから，教育社会学も社会を語る際に，近代社会に特有な一元的空間を認識の土台としてきたことに近似しているということができる。さらに，この空間認識における没空間性は，「一つのまとまりをもった全体であり，時間と空間をこえて一般化しうる共通性をもった思考と実践の組み合せ」[14]として把握されてきた近代社会の空間認識に共鳴している。

他方，教育社会学は，「これまで社会はきまって内因的なものとみなされ，時間的でも空間的でもない独自の社会的構造をもつものとされてきた」[15]というアーリの指摘に象徴的なように，「全体的な社会構造のなかで教育の位置づけと機能を分析する営み(傍点は筆者)」[16]として自らを定位し，全体社会構造(例えば，「階層構造」，「職業構造」，「経済産業構造」，「高校間格差構造」など)と教育の関係を基点に，社会学的な分析を行なってきた。こうした研究志向の前提にあるのは，諸構造が本質的に国家全土を等しく覆っているということ，そして，それを社会とみなすという基本的観念である。このような観念は，国民国家がすぐれて均質的な統合空間であるとしたアンダーソンの理解[17]に通じるものであり，また同様に「社会学者の社会，マクロ経済学者の国民経済，政治学者の政治，歴史家の国民などはどれも，そこに政治的，社会的，経済的諸過程のあいだの根本的な空間的調和があるとみなしている(傍点は筆者)」[18]という分析態度の存在も意味している。それゆえ，国土地理あるいは全体社会に一致する一つの実態としての近代社会空間が暗黙裡に前提とされるだけでなく，そもそも教育社会学では社会空間自体を問題化する必要性を持ちえてこなかったといえるのである。そこには，空間を消去することでより社会学的な言説を構成し，教育現象と空間を体系化することを抜きにしても研究を進めることが可能であったという事情を垣間見ることができよう。では，以上のような社会空間認識が支配的な教育社会学では，「地域」はどのように扱われてきたのだろうか。

3　「地域」空間の射程　―地域構造分析の特徴を手がかりに―

ここでは，「大学進学率の地域格差研究」を例にしてみよう[19]。いわゆる地域格差問題は，「地域」を特定の地理的範域に基づく単位として比較した際の相異を格差として把握するものである。そのため，この問題化においては，「地域」の空間枠組みの固定性が一番顕著に立ち上がってくるため，「地域」を扱う研究の空間の射程を批判的に捉え直すには適当な題材であると思われる。従来，「地域」格差というとき，格差を比較する際の単位となる「地域」が何なのか，それが不明瞭であると常々議論されてきた。つまり，格差の内容は，地域の取り上げ方如何によって異なってくるものの，当の地域が，指標の取り上げ方如何によって多様に認識されているという問題である。中西は，これらの問題の由来を「地域」空間が分析の外在的な枠組みとして設定され，その範域内での特定の社会現象が考察されるという方法にあるとみる[20]。この問題を中心に，「地域」と分析の方法論について，「社会空間論」の視角から検討を加えてみよう。

進学という社会現象を規定する要因を分析する研究[21]は，「出身階層あるいは家庭環境と同時に，地域の特殊性が作用している(傍点は筆者)」という想定のもとに立って，進学を規定する要因に家庭環境，教育環

境と同等の地域環境とを設定する[22]。その具体的な指標には，所得や職業構造，産業構造といった社会経済的要因，大学・短大などの定員規模(収容率)，18歳人口数などが用いられることが多い。そして，多変量解析などの手法が用いられ，それぞれの変数と進学率とが強い結びつきを有していることが明らかにされてきた。

この空間認識の特徴は，先に述べたように，「地域」空間が分析を枠付ける地理的単位としてアプリオリに設定されていることである。ここでの「地域」とは行政制度区域に基づく地理的範域(多くは都道府県)を定める空間枠組みによって構成されているといってもよい。その意味で，行政空間と呼ぶことができる。しかしながら，こうした「地域」空間認識には，往々にして地域それ自体の論理が問われることなく，単に地域という名称がそえられているのみだという批判[23]が出されていることは看過できない。それは，固定的な空間認識への批判であると同時に，本来の研究目的である「地域の特殊性」を解明する作業が適切になされているのか，という疑義へと発展するからである。

地域格差研究は地域間の際を生じさせるとする因果関係を根本的に問題としている。だが問題なのは，地理的範域の空間性や範域を分ける境界の社会性が問われることなく，まさにそのことによって，無自覚に設定された固定的な空間内の「地域の特殊性」の問題に関心を特化し，「等質地域的な発想でもってまるごとの空間同士を比較させる」[24]ことになる点である。そもそも「地域の特殊性」の観点とは，社会現象の地域的属性への因果連関を求める地域社会学の学問的課題[25]に近いと考えられるが，「地域」を構成する諸構造のうち，何が現象の地域的属性という見地から分析・説明されうる次元であるのか，その見極めは実はそう簡単なことではない[26]。

我々は一定の地理的範域のなかであらゆる現象，物事を目にし，経験する。そして，それらを「地域」概念の立ち上げによって，マクロな次元，全体社会の文脈とは異なる「地域の特殊性」や「地域それ自体の論理」をあぶり出すことが可能になると判断し，本来的にそこに地域研究の利点を見出している。けれども，地域的属性の内実を判断する困難性と「地域」を方法概念として研究に応用することに対する論理的閑却が解決されぬまま，如上にみた地域構造分析では，「地域」の同定が既存の地理的範域の区切りをもとに行なわれるがゆえに，その「地域の特殊性」が往々にして「地域」と銘打たれた空間内の諸構造の在り方のみに限定され，摩り替えられてしまうという問題を指摘することができる。換言すれば，部分社会レベルで均一的・統合的な「地域」空間が想定され，全体社会構造の部分社会における投影のされ方が地域構造の相異として顕れるとの理解，すなわち均一的・統合的空間の全体社会を射程とする構造分析の認識論や方法論が，部分社会にも同様に持ち込まれているといえるのである。

こうした研究上の隘路を回避するためには，空間軸を挿入することで闡明になる「地域」の空間構成指標を基軸とした分析方法が有効な手がかりとなるだろう。先に，本節で取り上げた地域格差研究では，「地域」を行政空間と読み替えることができると指摘した。これは，都道府県という社会空間が空疎な単位として存在しているのではなく，その地理的範域を定める明確な境界が，国家行政システム体系を基盤とした制度的範域を指標として組織化されているものであることを示している。そして，その制度的範域によって境界づけられた行政空間は，様々な社会的機能を反映することになる。この場合，一例として行政サービスの供給可能な範囲としての行政空間と等値である「地域」を提示することができるだろう。つまるところ，「地域」概念には，背後にある複雑な社会関係とその地理的範域を定める社会的な空間認識がすでに包含されているのである。この「地域」空間を構成する指標のコンテクストを明示することで，「地域」空間が編成される過程を地域分析に組み込むことができる。それによって，社会現象を「地域」という所与の空間で扱うだけに留まる稚拙さを大いに払拭することもできると考えられる。

「地域」を扱い，記述・分析するいかなる研究にも，極めて社会的な意味が付与された空間認識が伴わざるをえない。これまで我々は「地域」概念を用いる際に，その思考過程を捨象するか，あるいは無視する認識論的態度をとることで，「地域」を固定的な空間枠組みに押し留めてしまう傾向が強かったのである。

4　結論　―「社会空間論」の視角による「地域」空間の相対化―

前節で扱った「地域」分析・研究を「社会空間論」の視座から捉え直すと，「地域」が空間としてはやはり所与の静態的なコンテナとして認識されてきたといえる。畢竟するに，部分社会レベルで切り取られた固定的空間に依拠する「地域」が，格差を比較する単位として取り上げられる際，その空間性が自然発生的かつ論理的に先立って前提とされる点で，前述したモダニズム的

空間認識に通底しているのである。それゆえ，教育現象の地域的バリエーションを生み出すメカニズムを解明する(「地域の特殊性」とは何か。それがなぜ，どのように生じるのか。そしてそれが教育現象といかなる関連を有しているのか。)という「地域」に着目する研究の特性を希薄化している可能性が高い，と仮説的にまとめることができるだろう。そして，以上にみた「地域」の「社会空間論」的考察から導出される含意というのは，地域社会は全体社会のミニチュアとしての性格を帯び[27]，均一的空間前提による地域的統一性が色濃く反映される社会という想定が，陽表的にせよ，陰伏的にせよ，前提とされているということである。しかしながら，部分社会たる地域社会が全体的社会構造と密接な関連を持つことは論を俟たないものの，それは単なる全体的構造の投影でもなければ，部分社会の累積によって全体社会が構成されているわけでもない。したがって，研究の認識論および方法論に引き付ければ，「地域」の空間性を不問に付しながらも，固定的空間としての「地域」に縛られ，そこに空間性を排除した社会構造論の分析視点が導入されることで，地域社会なるものの内在的かつ特有のメカニズムを解明する試みが，狭隘化されてきたといえるのではないだろうか。

以上の考察から，これまでの教育社会学研究は，ひとえに空間に対して無頓着であったということができる。もちろん，この指摘は従来の教育社会学研究の意義自体を真っ向から否定し，貶めることを意味しているのではない。すでに挙げた地域格差研究をはじめ，近代社会学では，地域社会の共同生活の内容，すなわち＜共同性＞(Common Ties)や＜社会的相互作用＞(Social Interaction)を構成要素とした「地域社会」の捉え方を行なってきたし，近年は地域社会システム論的な地域社会論が支持を得ているという[28]。そういった「地域社会」の成り立ちを解明する研究特性を有する教育社会学の意義も，大いに認められるべきであろう。ここではあくまで，「地域」の空間性を考察の俎上に載せて，教育社会学研究の中で空間をめぐる諸々の観点がいかなるものであるかを問うたときに下される判断なのである[29]。

教育社会学において「地域」の空間性を摘出すると，「地域」という切り込みから社会学的分析を行なうことからは，まず「地域」の空間性から様々な社会事象を分析することが可能であるということ，加えて，空間的な形態を持った社会なる「地域」が存していることが示唆される。これは，空間と社会としての「地域」のあり方とが何かしらの関係性を取り結んでいることの現れでもある。ゆえに，本稿の考察を通じて，その「地域」空間の構成を踏まえた「地域」の性格を理解する出発点から，研究課題を定め，地域社会の動態的メカニズムを分析する視座を持ち合わせていかねばならないことが明らかとなった。

教育に関わる問題においても，「地域社会」の重要性が主張されて久しいが，「地域」をめぐる問題群を分析する際に「地域」の空間性を意識化し，一度「地域」の空間的前提を相対化する作業を行うこと，さらに「地域」の空間的構成を問うことは，地域社会が今や伝統的社会に比して開放性・流動性が激しく，日々多くの社会変動に晒されていること，地方分権化や「創造的コミュニティのデザイン」[30]の具現化がますます要求される潮流の中にあることを鑑みても，この新たな「地域」の認識論は，地域分析の戦略の一つとなると考えられるのである。もはや「地域」は現実的にも固定的な外在的フレームとしてのみ，理解されるべきものではないことは明白である。

我々は，確かに居住する自治体に生活空間の大部分を依拠し，一方で様々な諸活動に基づく多層的な範域を生きている。それは，「社会空間論」を参照すれば，社会的な実践の関数，構造化されていながらも変化も内包するマテリアルなプロセスを含んだものとして概念化される空間を眼差しながら，同時に異なる知覚や実践，関係性に応じて，いくつもの空間が重層的に生きられているという認識である[31]。そのとき，速水が端的に指摘するように，「個人にとっての日常生活のリアリティはあくまで地理的に限定される空間において実際に経験される社会関係においてのみ存在しうる。…(中略)…実は私たちの生活は空間的な拘束性からのがれることはできないし，私たちの生活のリアリティは空間的に限定されたものでしかない」[32]ことを念頭に置いた上でなお，既存の区域に固定された行政空間からのみ「地域」を安易に想定するのではなく，様々な諸主体(組織，人々，政策機構など)の営みとの関係性の中から「地域」空間を動態的に把握する方向性を探っていくことが重要だと最後に再び強調しておきたい。

そこに教育をどう位置付けて論議していくことができるのか，本稿で論じた社会空間論の視角を参照しつつ，「地域」自体を動態的に把握する試みは，今後の課題であると同時に，教育社会学でも実態に迫る有効な視点となるはずである。したがって，目下「地域」の実定性を生み出す我々の思考そのものを反省的に問い直すことで，教育と「地域」の空間構成が密接に結びつく地点を，空間が社会的に分節，編成される過程として，

さらにその「地域」空間をめぐる人々の実践や社会現象の関係性として把握する新たな分析基点を導くことができると結論づけられる。そして，今後は「地域」の空間性が社会的に構成され，実際に問題化される「地域」の成り立ちを実証的に解明する認識論の精緻化と方法論の整備についての議論へと深化させていきたい。

歴史や時間に関する概念に比して地理や空間をめぐる概念化が長らく不十分であったのは，それほどまでにある特定の空間認識が深く浸透しており，改めて論じるまでもないとされていたからに他ならない[33]という指摘を受け止めるならば，「地域」を所与の枠組みとして位置づけるのではなく，相対化した上で教育事象と関連する社会空間としての「地域」を，「社会空間論」の視角から教育社会学の分析概念，方法概念として鍛え上げていくことが肝要である。なぜならば「地域」概念は，それ自体社会的意味を有する，すなわち，「地域」という空間形態と社会事象の関係性の認識や，その範域，境界を定める空間認識を伴う思考から導かれる概念である以上，「空間の社会的構成」と「社会の空間的構成」とを不可分の結び付きとして，空間と社会の関係を再考し，その上で地域社会を対象とした分析を進めるものとして，今後さらに検討を加えていく必要があるからである[34]。その社会的諸関係や人々の営みとのダイナミズムの中で，いかに「地域」空間が編成され，政策や地域の課題と結びつき対処されているのかを問うことは，「地域社会とは何か」という極めて建設的な課題への到達をも可能とするであろう。

（指導教員　苅谷剛彦教授）

≪註≫

1）望月幸泰　2000，「『地域』と『地域政策』の概念」日本政策投資銀行　地域政策研究センター『PR　レビュー』No.3，58-63頁。

2）中西典子　1993，「地域社会学への空間視角導入の方向性について―戦後日本の地域社会学における分析方法上の検討から―」『立命館産業社会論集』第29巻　第1号，263頁。

3）「空間」に関するキーワードを吉見にならって挙げると，例えば以下のようなものがある。―「スペース」「プレイス」「ロケーション」「ポジション」「ボーダー」「マッピング」「トポグラフィー」「ランドスケープ」「グローバル／ローカル」など―さらに吉見は，「こういった言葉によってしか現在というものを語りえないという状況がいまやわれわれを取りまいている」と指摘する（水内俊雄・大城直樹・多木浩二・吉見俊哉　1997，「『新しい地理学』をめぐって」INAX 出版『10＋1：ten plus one』vol.11，64-84頁）。

4）Massey, D.　1993，*Politics and Space/Time: in Place and the Politics of Identity*, Routledge.（篠儀直子訳　1997，「政治と空間/時間」INAX 出版『10+1：ten plus one』，121頁。）

5）Giddens, A.　1990，*The Consequences of Modernity*, Polity Press.（松尾精文・小幡正敏訳　1993，『近代とはいかなる時代か―モダニティの帰結―』，而立書房，35頁。）

6）近代経済学における西欧の発展モデルにつながる図式（ロストウなど）や，資本主義の生産システムや矛盾を歴史的発展として跡づけてきたマルクス主義などを挙げることができる。

7）吉原直樹　2002，『都市とモダニティの理論』，東京大学出版会，39頁／吉原直樹　1999，「都市社会学の新しい課題」藤田弘夫・吉原直樹編『都市社会学』，有斐閣，240頁。

8）岩永真治・中筋直哉　2000，「［総説］　空間と場所」地域社会学会編『キーワード　地域社会学』，ハーベスト社，102頁。

9）速水聖子　2002，「コミュニティ論におけるローカリティ（locality）概念の考察」東日本国際大学経済学部『東日本国際大学研究紀要』第7巻　第2号，61-80頁。

10）苅谷剛彦　1995，『大衆教育社会のゆくえ―学歴主義と平等神話の社会史―』，中央公論社。

11）竹内洋　1996，「大衆受験社会のパラドクス―欲望なき競争のゆくえ―」金子書房『児童心理』10月号，1342-1347頁。

12）水岡不二雄　2002，「経済学が忘れてしまった空間」水岡不二雄編『経済・社会の地理学―グローバルに，ローカルに，考えそして行動しよう―』，有斐閣アルマ，23頁。

13）Foucault, M.　1980，*Question on Geography, in C. Gorden*(*ed*), *Power/Knowledge: Selected Interviews and Other Writings*, Harvester Press, pp.1972-1977.

14）Cooke, P.　1990，*Back to the Future: Modernity, Postmodernity and Locality*, Routledge.（坂井達朗訳　1995，『ポストモダンと地方主義』，日本経済評論社，5頁。）

15）Urry, J.　1995，*Consuming Places*, Routledge.（吉原直樹・大澤善信監訳　2003，『場所を消費する』，法政大学出版局，6頁。）

16）森直人　2002，「＜選抜と配分＞をめぐる1990年代教育社会学の展開―歴史・階層・労働市場―」東京大学社会科学研究所紀要『社会科学研究』第53巻　第1号，77-101頁。

17）Anderson, B.　1983，*Imaged Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso.（白石さや・白石隆訳　1997，『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行―』，NTT 出版。）

18）Wallerstein, I.　1996，*Open the Social Science: Report of the Gulbenkian Commission on the Restructuring of the social sciences*, Stanford University Press, Stanford.（山田鋭夫訳　1996，『社会科学を開く』，藤原書店，57頁。）

19）「地域」が多様に意味付与されることを鑑みれば，「地域」を扱う研究は何も地域格差研究に限ったものではない。しかし，本稿では特定のエリアを「地域」と命名し，多様性を見出す視点として「空間軸をとれば，地域性が問題となる」というクライナーの理解（クライナー，J.　1996，「日本の地域性の現代―ひとつの問題提起―」クライナー，J. 編『地域性からみた日本―多元的理解のために―』，新曜社，2頁）を背後仮説として導出された研究志向性を強く有するものとして地域格差研究を位置づけ，本稿の検討に適切な事項であると考えている。なぜなら，これらの研究は，同一の社会現象が特定の地理的範域ごとに異なる様相を呈する因果論の解明を目指しており，そこには，「地域」に依拠す

る空間表象と社会現象の相互置換関係が不可避的に潜在しているからである。さらに，社会構造のなかで教育の位置づけと機能を分析する方法論を引き継ぐ地域構造分析として括ることが可能なため，教育社会学の方法論と空間認識の交叉する地平から「地域」概念の再検討を加える条件に適っていると思われる。

20)中西典子 1994,「『社会・空間』視点にもとづく地域認識の可能性—都市・農村論の再考を通じて—」経済地理学会『経済地理学年報』第40巻 第3号，19-37頁。

21)例えば，以下を参照。天野郁夫他 1983,「進路分化の規定要因とその変動」東京大学教育学研究科『東京大学大学院教育学研究科紀要』第23巻，1-43頁。林拓也 1997,「地位達成における地域間格差と地域移動」日本社会学会『社会学評論』vol.48 No.3，334-349頁。猪俣歳之 2002,「地域別大学進学率の推移とその背景—大学進学者数と18歳人口の変動に着目して—」東北社会学会編『社会学年報』，159-177頁。間淵泰尚 1997,「大学進学率の地域間格差の変動—高等教育計画期を中心として—」東京大学大学院教育学研究科『東京大学大学院教育学研究科紀要』第37巻，91-100頁。舞田俊彦・松本良夫 1999,「大学進学率の県間格差の分析」東京学芸大学教育学科『教育学研究年報』第18号，97-100。友田泰正 1970,「都道府県別大学進学率格差とその規定要因」日本教育社会学会『教育社会学研究』第25集，185-195頁。山本真一 1979,「大学進学希望率規定要因の分析」日本教育社会学会『教育社会学研究』第34集，93-103頁。吉本圭一 1993,「都道府県別にみた大学・短大進学率と地域移動」第一法規出版『教育と情報』No.420，2-9頁。

22)友田 前掲論文，185頁。

23)藤田弘夫 1982,『日本都市の社会学的特質』，時潮社。

24)中西 1994，前掲論文，20頁。

25)藤田弘夫 1990,『都市と国家—都市社会学を超えて—』，ミネルヴァ書房，196頁。

26)藤田 1990，前掲書，198頁。

27)蓮見音彦 1991,「現代地域社会論」青井和夫監修・蓮見音彦編集『地域社会学』，サイエンス社，23頁。

28)松野弘 2004,『地域社会形成の思想と論理—参加・協働・自治—』，ミネルヴァ書房，32頁。

29)そのため本稿は，教育社会学における「社会空間論」的関心の希薄さ，「地域」という空間形態から社会事象にアプローチできるという前提を有しながらも，それを問わずして空間的範域が無自覚に設定されてきた事情を浮き彫りにすること，そして，「地域」空間を手がかりとした社会現象と空間との関係性を問う視点を提示することに主眼を置いているのである。

30)苅谷剛彦 2004,「創造的コミュニティと責任主体」苅谷剛彦他編『創造的コミュニティのデザイン—教育と文化の公共空間—』，有斐閣，1-22頁。

31)吉見俊哉 1999,「空間の政治，あるいは都市研究とメディア研究の対話をめぐって(上)」青土社『現代思想』vol.27-13，70頁。

32)速水 前掲論文，65頁。

33)Agnew, J. 1993, *Representing space: Space, scale and culture in social science*, in J. Duncan and D. Ley, (eds) *Place/Culture/Representation*, Routledge, London, pp.251-271.

34)Soja, E. W. 1989, *Postmodern Geographies, The Reassertion of Space in Critical Social Theory*, Vergo.（加藤政洋他訳 2003,『ポストモダン地理学—批判的社会理論における空間の位相—』，青土社。）